

## 終戦のとき — おもいつくままに

渡辺 和加

終戦の時、私は、美唄国民学校三年梅組、受持ちは英先生で若い女の方でした。クラスは、三年から女生徒、男生徒に分かれました。

8月15日から幾日か過ぎたある日、先生の「今日は、墨を濃くすってくださいね。」のことに私たちは、一生懸命墨をすりしました。その後、教科書の文字を筆でなぞるのでした。不思議なことをしたものです。教科書は、黒い棒ばかりのページになり、使えなくなりました。代用品として、「みにくいあひるのこ」が教材になりました。外国のお話で珍しくて夢中で読んだのも今では懐かしく思います。

その時の校舎の今はなく、その跡地は郷土史料館、駐車場、中央公園となり、市民の憩いの場になっています。

そのころの美唄は、大きい子も小さい子も、近所の子供たち皆が縦の列になり国道も遊び場として毎日、日の暮れるまで楽しく遊びまわることができました。

戦争中に、美唄から疎開\*1する人はいませんでした。近所の方が被災を恐れて、品物を農家の方に疎開したと大人たちが話していました。また、私達のクラスにも東京から疎開して来た人がいました。お名前は残念ながら思い出せませんが、体の大きいかわいい人だったと思います。

8月15日からどれくらい過ぎた日だったのでしょうか。大きい飛行機の音に、外に出てみると、乗っている人の顔がはっきり見えるほどの低空で飛んでいてびっくりしました。その日か、幾日か後だったか、三井美唄に色とりどりのパラシュートが落とされ、その様子は、青空に大きな花畑ができたようにきれいで、みんなしばらく我を忘れて見惚れました。三井美唄炭鉱に外国の人が大勢捕虜\*2として連れてこられ、強制的に働かされたのでした。その方たちへの慰問品とか日用品などがパラシュートで直接届けられたのでした。いつ、どのようにして連れてこられていたのでしょうか。戦争は、秘密が好きですね。

自由になったその人達がある日の夕方、ガードをくぐって美唄に歩いて下りてきました。それはまったく人、人の洪水で、さして大きくない街に押し寄せてきて溢れました。あつという間の出来事でした。私達は、恐ろしさに家に逃げ帰り、静かにしていました。今まで抑えられていた反動で街に来て憂さを晴らしたんだそうです。直接関係のないところでしたのに。

私の家は、国道筋にあったんですが、進駐軍が美唄を通過するときのことです。見ると撃たれると噂が流れました。でも、怖いもの見たさに、暗くしてほとんどの人が息を殺して見たんだそうです。

話が前後しますが、美唄に防空壕があったのをご存知でしたか。私のうちでも父が苦勞してつくりましたが、実際には使わなくてすみませんでした。本当によかったと思います。

\* \* \* \* \*

私のところの上の孫がこの4月に三年生になります。私が終戦を迎えたときと同じ学年で、その偶然に不思議さを感じます。

日本は昭和 20 年に終戦を迎え、それ以後は平和になりましたが、世界ではその後も朝鮮戦争、ベトナム戦争など次々と休みなく戦争が続いています。本当に世界中で争いの終わるのは、いつになるのでしょうか。孫や若い方々のためにも、戦争のない日を待つ心でいっぱいです。

(わたなべ わか 昭和 11 年生まれ)

**\*1 疎開** 空襲などの被害を少なくするために都市の住民や建物などを地方に分散することを「疎開」という、昭和 19 年 8 月からは「学童疎開」が始まった。都会の少年少女たちは、親類などを頼っていく「縁故疎開」や学校などでまとまっていく、「集団疎開」などをし、家族と離ればなれの生活を余儀なくされた者も多かった。

**\*2 捕虜** ここでは連合軍の捕虜のこと。三井美唄にあったのは、函館俘虜収容所本所で、昭和 20 年 6 月に戦況悪化に伴い函館から移転されたもの。南美唄町の南側の山麓（現在の自衛隊用地の一部になっている高台の中腹）に板囲いした宿舎を急造し、396 名の連合軍捕虜を終戦時まで収容していた。捕虜は、主に労働力不足の炭鉱の作業に従事させられた。